

重文・板絵著色神馬図と金銅聖観音像懸仏 (天童市・若松寺)



8

天童市の鈴立山若松寺が所蔵する国指定重要文化財(重文)の板絵著色神馬図(いたえちゃくしよくじんめず)と、金銅聖観音像懸仏(こんどうしよかんのおんぞうかけぼつ)の2件は、同じく重文である若松寺観音堂の内陣の壁に掲げられている。板絵著色神馬図は、横板5枚をつなぎ合わせて奉納額に仕立てたもので、縦163㎝、横182・5㎝。黒い烏帽子(えぼし)をかぶって白い装束を着た神人(じんじん)が飾り馬を懸命に引いている姿、という絵柄だ。左上に、郷目右京進貞繁(ごめうきょうしんさだ)のめうきよのしんさだしのうめうかけぼつ(おんぞうかけぼつ)が描き、自身の亡くなった妻の菩提(ぼだい)を弔(なぐさ)めたため、室町時代末期の1563(永禄6)年に奉納した、ということが墨書されている。郷目は、寒河江一帯に勢力を及ぼした豪族・大江氏の家臣



重文の板絵著色神馬図。郷目右京進貞繁が60歳すぎに描いたと推定されている



重文の金銅聖観音像懸仏。金メッキの名残がみられる

室町末期奉納
「神馬図」

あふれる躍動感

鎌倉中期奉納
「懸仏」

大きく美しく



神馬図は内陣の格子戸の上部に掲げられており、外陣からは見えない



鏡板に立体的な像が付けられている

で、武士ながら画人でもあった人物。画面いっぱい人と馬を描いた神馬図は躍動感にあふれている。郷目の作品は20点余りが現存するが、この神馬図は、緻密(ちみつ)な写生を基にした詩情の趣を醸(か)す絵を得意とした郷目の、画才の一端がよく表れた傑作として評価されている。

「馬を引く神人は郷目自身で、馬の背に置いた打ち掛けを奥さんに見立てているのではないのか。つまり自分が奥さんを極楽に連れていくんだ」という意図を込めた絵柄と見る」と、若松寺住職の氏家榮脩(えいしゅう)さん(77)は解説する。

一方の「懸仏」は、銅製の円板の上に神仏の姿や梵字(ぼんじ)を線刻したり仏像などを浮き彫りしたもので、神仏習合の考えから生まれた。鎌倉・室町時代にかけて盛んに行われ、御正体(みしょうたい)とも称され礼拝された。

若松寺が所蔵する重文の金銅聖観音像懸仏は、直径75・5㎝、重さ60㎏。円形の鏡板は銅鑄(どうちゆう)製で、聖観音像は丸彫りに近い厚肉彫りで造られており、その姿は何とも優しく美しく気品がある。一般的に30㎝前後の大きさが多いので、同寺の懸仏は破格のサイズであり、尊像の姿と併せて「日本における懸仏の代表的な作例」と称賛される。鏡板の裏側に刻銘があり、成生庄(ていせいじょう)の檀那(だんな)藤原真綱(ふじのらまのつな)が鎌倉時代中期の1263(弘長3)年に奉納したことが分かる。

昔は内陣と外陣を分ける壁面の中央上部、須弥壇(しゆみだん)の前の外陣上部に掲げられていた。大正時代に撮られた写真にその様子が写っているという。「本尊の聖観音像は行基菩薩(ぎやくさ)の手彫りと伝わり、他見を永久に禁止された秘仏なので、懸仏を御前立ちとしていたようだ」と氏家住職。「板絵著色神馬図と金銅聖観音像懸仏は内陣にあり、特に神馬図は外陣から見えない位置に掲げられているので、希望者にはできるだけ見せてもらっている。どうぞ遠慮なく申し出てください」と話していた。

メモ 境内巡拝時間は午前7時～午後6時。巡拝料は無料。無料駐車場あり。車は山形自動車道・山形北ICから約20分、JR天童駅から約15分。天童市山元2205の1。電話023(653)4138。ホームページhttp://www.wakamatu-kannon.jp/